

# アンコール・ワット西参道環濠内および参道における 発掘調査出土の遺物について (西参道修復事業(第二期修復事業出土資料))

大阪市教育委員会事務局  
宮本康治

## はじめに —遺物報告に至る経緯・経過—

アンコール・ワット西参道においてはその北側の修復工事が進められており、東半分の第Ⅰ期工事については2007年に完了し、その経過は報告書の形でも示されている(上智大学ほか2011)。現在その西半の部分において第Ⅱ期の修復工事が進められている(図1・2、写真1)。当該の修復工事においては、参道の構築や改変の状況などについて、考古学的な知見を得ることも一つの課題となっている。

そこで工事に先立って確認の発掘調査を行うことが計画され、まず環濠内の堆積や基礎の状況について基礎的な情報を得ることを目的として発掘調査を2015年の年末に行った。その結果の概要については日本語による報告を行っている(丸井ほか2016)。その後参道の修復工事の本格的な開始に先立って、2017～2018年にかけて5カ所において部分的な掘り下げを行い、参道内の構築の状況および崩落や改変の過程などを確認する作業を行った。これらの確認調査についてはその一部について英語により概要を報告し(Sophia center 2018)、口頭での発表を行ってきている(丸井ほか2019)。

本稿では環濠内での調査についての概報時には資料化が十分ではないところもあったため出土遺物について報告するとともに、参道での試掘時の出土遺物の一端を紹介することにする。そこで環濠内における状況と参道上におけるものと項目を分け、調査地の状況について簡略に触れながらそれぞれの出土遺物を示し検討を加えていく。なお、参道上における調査については現在修復作業が進行中でもあって暫定的なものとなるため、加わりつつある資料については改めて報告を作成することにしたいと考えている。

## 1. 西参道北側環濠内出土遺物について

### (1) 出土地点・層位の概要と遺物の概況

西参道北側の環濠内においては2015年に発掘調査を行った。調査を行ったのは参道北側で中央にあるテラスのすぐ西側の地点で、約10㎡の広さである(図2)。調査時の概報(丸井ほか2016)をもとに調査位置と堆積の概略等を見ておくことにしよう。ここでは参道の基礎の基礎部がラテライトが徐々に広がる形で積まれている状況が確認され、円柱がのる部分を1段目とする少なくとも6段で築かれること、調査した範囲では最下から5段目までラテライト片を含む土砂で整地され、その上に機能時の堆積が遺存していることなどが明らかになった(図3)。ここでは大略9層に区分される地層が確認され、下位より第9～6層はラテライト片等を含む堅緻な地層で参道構築時に整地したものともみられた。第5層は黒色の粘土から細粒砂の細かな堆積物が

らなり、静水状態で堆積したことがうかがわれ、参道構築後の機能時の堆積である。第4・3層はさらに後の機能時の堆積で、第1・2層は近現代のものとみられた。このうち、出土遺物は第5層で主に出土し、第4層以上でも少量があった。

出土遺物には崩落したとみられる石材もあるが、それを除くと計87点があり、うち5点を除いて第5層のものである。無釉の土器、黒褐釉・無釉陶器、中国産磁器、瓦等が含まれ、より上層では土器、陶磁器があった。前回の概報時には概況を示すのにとどまっていたため、まとめて出土のあった第5層からの遺物を中心に紹介していくことにする。

## (2) 各遺物の概要 (図4、表1、写真4～35)

### ・土器 (1～7)

土器には壺あるいは甕類等が含まれる。そのうち壺あるいは甕類1～4、コンロの一部とみられる5、甕類の体部片6・7を示す。なお、7のみ第4層からの出土である。

1は甕類の口縁から肩部にかけて、口縁は横方向のナデで調整し、体部外面はタタキメかとみられる痕跡、内面は指等によるオサエ痕が残る。口径18.6cmである。2は広口の壺の口縁から体部で、口縁端部は外上方に肥厚し、肩部に沈線がめぐり、3は同様に口縁部で、端部外面に沈線がめぐり、4は壺類の口頸部から肩にかけての破片である。屈曲部付近に段がめぐり、5は船形を呈するコンロの破片で、器を支える脚部分から体部にかけてとみられる。内外面とも横方向のナデを施し、脚付近は沿ったナデである。残存している外周からすると径28cmほどの円弧を描く可能性があり、3カ所で支持する形であろう。被熱の痕跡はあまり観察できない。6は甕類の体部片で外面にスガが付着する。内面は横方向のナデ状の調整である。7は第4層からのものであるが、甕類のタタキメの状況のため図示した。外面には矢羽根状のタタキ痕跡があり、内面には不整形ではあるが円形を呈するくぼみがあり、無文のあて具痕の可能性のある破片である。

### ・無釉陶器 (8・9)

無釉陶器には壺等の体部から底部があった。8は壺の肩部で、回転によるナデがめぐり、9は壺類の底部で、底面は調整の痕跡は認められず、外面は斜め方向のナデあるいはハケメ状の痕跡がある。内面側は回転によるナデが認められる。

### ・黒褐釉陶器 (10～12)

10は壺類の口縁部である。端部は横方向に突出する。11は壺の頸部で外面に6あるいは7線で一単位となる波状文がめぐり、12は壺類の体部下半から底部にかけてである。あまり釉薬のかかりがよくない。円盤状の底部に外反する体部が続く。底面は調整が見られず、体部の内外面は回転によるナデが見られる。底径16.8cm、残存高18.4cmである。

### ・中国産磁器類 (13・14)

13は青磁碗の口縁から体部にかけての破片である。復元口径15.5cmで、やや浅い形態である。口縁部外面には別個体の口縁が溶着している。体部内面には不明瞭だが凹線が1条めぐり、体部外面には下半でにおい稜線がめぐり、14は碗の体部とみられる破片である。内面には不明瞭な凹

凸があり花文等の可能性があろう。ともに釉調等は龍泉窯のものに類する。

・不明陶器 (15)

第4層からのもので口縁部の破片と推測する。器形は不明である。口縁端部は無釉で内外面に明褐色の釉薬がかかる。

・瓦 (16)

平瓦で、端面と側面のそれぞれ1面のみが残り、全体の法量は不明である。ストッパーの状況からみると幅はその付近で15cm前後と推測される。側面の部分は上方へと折り曲げ、ストッパーを除いた高さは4.7cmほどである。ストッパーは幅1.6cm、高さ0.7～0.8cmほどである。側面および端部についてはナデを施す。無釉である。

(3) 小結

以上主なものを紹介したが、西参道で1998年に調査を行った地点での状況とも比較しながら整理しておこう。まず全体的な傾向から見ておくと、参道東端の1998年調査地では全体で1,500点あまりの遺物が出土し、とりわけ瓦が1,100点以上と多い点が注意される。本調査地では全体で100点に満たず、瓦も10点未満で少ない。1998年調査地が20㎡ほどで今回の調査の2倍程度の面積はあるものの、寺院の主要部に近いということと対応する可能性が高いであろう。他の資料についても中国産陶磁器、クメール陶器なども今回の調査と比較すると多く、廃棄・投棄される地点に近いことが関係することが想定できるが、その一方で本調査地では甕等を含む無釉の土器類がやや多いことが注意される点である。

次に時期的な点について本調査地での各地層の年代について改めて整理しておくと、今回主に紹介した第5層については中国産磁器では12～13世紀等のものがあり、黒褐色釉陶器などアンコール期のものが主体となっている。第4・3層については年代を明確にできるものがなく不詳であるがポストアンコール期の可能性があろう。第2層は近代以降である。このため建造後に堆積するような状況となり、そこに投棄されたものが含まれた状況とみられる。東端の1998年調査地では12・13世紀を主とする時期のもの、および14世紀等のそれ以降の時期の陶磁器があり、時期幅があることが推測されている。本調査地では幅を明確にするものは少ないが大局的には類する傾向とみられる。また双方の調査地で16あるいは17世紀以降に下る時期のものはあまり多くはない傾向が見られた。アンコール・ワットについては16あるいは17世紀には活動が活発となり繁栄したことがさまざまな側面から指摘されているが、そうした時期に下る資料は多くはないといえよう。そのため環濠内に投棄されているものが寺院内あるいは周辺における活動とどのように関連するか今後とも注意していく必要がある。

遺物種・器種ごとの状況では、本調査地では土器類でススが付着した煮炊具も含まれていた。そのため、寺院内・外等の由来は不明なものの、近辺で用いられた調理等に関する用具が投棄されたものであろう。また中国産青磁では口縁に別個体が溶着したものがあつた。別個体片が溶着したものを除外せずに使用していたことは、選別をあまりせずに用いていた可能性があり、中国産磁器類の受容のありかたを推測する手がかりとなろう。

## 2. 西参道試掘地点出土の遺物について

### (1) 出土地点の概況と層位

参道においては2017年から2018年にかけて参道内の地層の状況や、崩落や修復・改変の状況を確認するため、5地点での確認調査を行ってきた（図5）。修復作業が進行中のため暫定的な状況ではあるが、出土遺物の一端を示しておく。

地層の状況については前述の概報において報告済みの第1トレンチを例にとって概況を示しておく（図6、写真36）。ここでは参道の上面から約4m以下（標高18.0m付近）まで盛土内を掘削し、以下についてボーリングを行って地下の状況を観察している。ここでは掘り下げて断面観察できた部分について盛土の状況を中心にしておく。標高18m付近から20m前後までは一部乱れるところはあるものの、もとの盛土が遺存しており、第15～07層がそれに当たる。それより上位では盛土が流出してラテライト材が乱れ、新たに土砂が入れられるなどしていた状況が観察されており、06層より上位がそれである。このように、参道の構築に伴って盛土された状態を保っていると思われる部分と、土砂が流出するなどして部分的に崩落したり、その後の修復等で変化を受けていたりするいわば二次的あるいはそれ以降の部分とに大別される状況があることが観察されている。

今回報告を行う3点ある遺物のうち、1は第5トレンチからの出土で、参道構築に伴う盛土層からのもので、本来の状況を保つ盛土層の可能性が高い。一方で2・3については第3トレンチからの出土で、参道構築後に生じた崩壊等に伴う地層からのものである。

### (2) 出土遺物の概要（図7、表2、写真37～42）

#### ・施釉陶器（1）

壺の頸部から底部にかけてである。頸部片と体部片は直接は接合しないが、諸特徴から同一個体とみて、あわせて図示する。クメールのものとみられ、内外面にオリーブ褐色を呈する釉薬がたれるなどして施釉陶器としているが、典型的な黒褐釉陶器のように外面の広範囲に厚く施釉されてはいない。頸部には三段の段がめぐり、体部は肩が屈曲しており、にぶい凹線が二条めぐり、段状になっている。底部径10.0cm、体部の最大径を測る部位で20.1cmほどである。

#### ・土器（2）

無釉の土器である。口縁が外反し、端部に向かって厚みを減じる。0.5～1.0mm大の砂粒を比較的多く含み、淡赤褐色を呈することが特徴である。口径17.4cmである。

#### ・中国産磁器類（3）

龍泉窯系とみられる稜花の盤の口縁部である。小片のため口径は明らかではないが、端部の内側ににぶい段があり、稜花のラインが認められる。類例からみて13あるいは14世紀ころのものであろう。

### (3) 小結

参道上での確認調査から遺物の状況を一部ではあるが紹介した。まず参道の盛土層に伴うもの

としてはクメールの施釉陶の出土があり、今後さらに検討していくことで年代論等にもかかわる資料となろう。また参道内の土砂の流出や崩壊時そしてそれ以降の堆積からの遺物として土器および中国産青磁などが確認されている。青磁は龍泉窯産の盤とみられアンコール地域の寺院遺跡では見られる器種であり、アンコール・ワットでも用いられていた状況がうかがわれた。これらは二次的な堆積からのものであるため間接的な資料ではあるものの、崩落や改変の時期的な手がかりとなるとともに一帯にもたらされた陶磁器・土器類の状況を知る手がかりとなろう。

### 3. まとめ

以上、西参道にかかわる調査のうち、環濠部および参道上での調査の概略にふれながら出土遺物の概要を示してきた。

まず環濠内調査での出土遺物では、中国産陶磁や土器・陶器、瓦等が含まれていた。以前の調査と比較して全体的な量や、とりわけ瓦が少ないなど、参道際ではあるが寺院中心から離れていることとの関連がうかがわれた。また土器には火にかけた調理具とみられる甕類があるなど、寺院等での煮炊に用いられたものを投棄したものも含まれているようである。時期的な状況では土器類や黒褐釉陶器等、中国産青磁で、アンコール期のもものとみられるものが主体となっているようである。第4・3層でも明確な時期的な手がかりは見られない。以前の調査（丸井1999）ではアンコール期のなかでも、枢府手の白磁などで13ないし14世紀代の可能性もあることを指摘してきているため（宮本他2010）、主となる堆積はある程度の時期幅をもつことが推測されよう。またその一方でアンコール・ワットが活況を呈したともされる16ないし17世紀のものは現状ではあまり見受けられないことも注意される点である。また中国産磁器類では1998年および今回の報告で扱う環濠内の調査では、1998年の資料に見られるように、合子もあるもののそれ以外に碗等の器種が一定量含まれていることが注意される。寺院およびその周辺においても、用いられた陶磁器の種類や器種などに変化があるか注意される点である。

一方、参道の確認調査についてはいまだ暫定的な状況ではあるが、出土遺物の一部を示した。オリジナルの盛土に伴う遺物ではクメールの施釉陶器があり、今後も検討を加えていくことで年代を検討する手がかりとなる可能性がある。また二次的な堆積に伴うものではあるが、中国産青磁で龍泉窯系とみられる盤や無釉の土器類等が出土しており、13～14世紀あるいはそれ以降時期がうかがわれた。地層の状況からでは構築年代を直接示すものではなく、内部が崩落した時点およびそれ以降の改変の時期の一端を示すものであろう。参道においては部分的な内部の確認調査を行った後に現在修復作業が進行中であり、今後もこうした成果がさらに増加することが想定される。そうした成果については今後検討を加えて改めて紹介等を行っていくことにしたい。参道の築造、そして改造・修復等の過程を検討していくうえでも重要な点となっていくものと思われる。

西参道に関連の調査としては、参道盛土あるいは環濠内など通常はあまり調査の手が及びにくいところであり、修復に伴う貴重な機会をとらえ、関連する資料を蓄積することが求められよう。今回は参道の盛土関連について暫定的な報告となったが、今後また資料を加えてまとめなおすとともに、投棄石材ほか他の遺物も含めていずれ検討を加え、参道のたどってきた過程について考古学的な知見をまとめておくことも課題となつてこよう。

## 〈主要引用参考文献〉

### 〈日本語〉

上智大学・上智大学アジア人材養成研究センター・上智大学アジア文化研究所（2011）『アンコール・ワット西参道修復工事 第Ⅰフェイズ』

丸井雅子（1999）「アンコール・ワット西参道出土遺物—西参道北側起訴分の掘削調査にともなう—」『カンボジアの文化復興』16、上智大学アジア文化研究所

丸井雅子・宮本康治・三輪悟・ニム・ソティープン（2016）「アンコール・ワット西参道の環濠内考古学調査」『カンボジアの文化復興』29、上智大学アジア人材養成研究センター

丸井雅子・宮本康治（2019）「アンコール・ワット西参道考古学調査の成果」、（東南アジア考古学会2019年大会発表）

宮本康治・丸井雅子・石澤良昭・片桐正夫（2010）「アンコール遺跡出土墨書陶磁器について—アンコール・ワット西参道修復に伴う環濠内埋土の調査出土資料から—」『日本考古学協会第76回総会研究発表』、日本考古学協会（および口頭発表）

### 〈英語〉

Sophia center for research and human development and APSARA authority 2018, “Brief report on archaeological survey at the western causeway of Angkor Wat: 2015-2017”, 『カンボジアの文化復興』30、上智大学アジア人材養成研究センター



写真1 西参道調査地の全景（北西から）

Ph.1 Investigation site of Angkor Wat western causeway (from northwest)

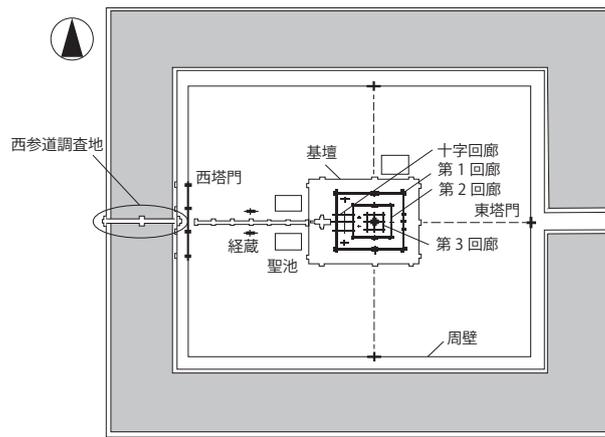


図1 アンコールワットの平面配置  
Fig. 1 Plan of Angkor Wat

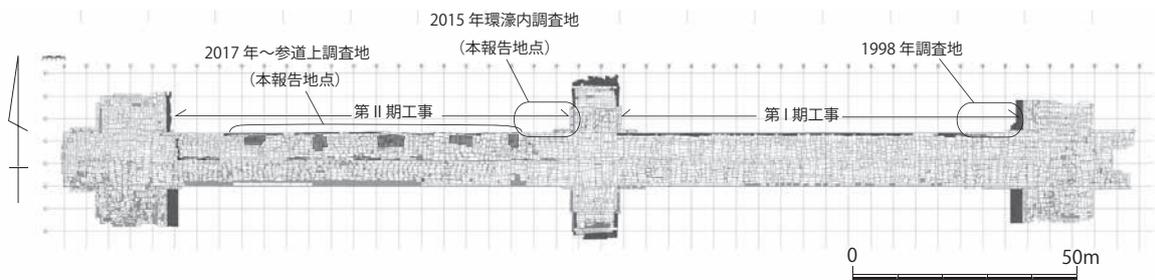


図2 アンコールワット西参道と調査地  
Fig. 2 Western causeway of Angkor Wat and investigation site

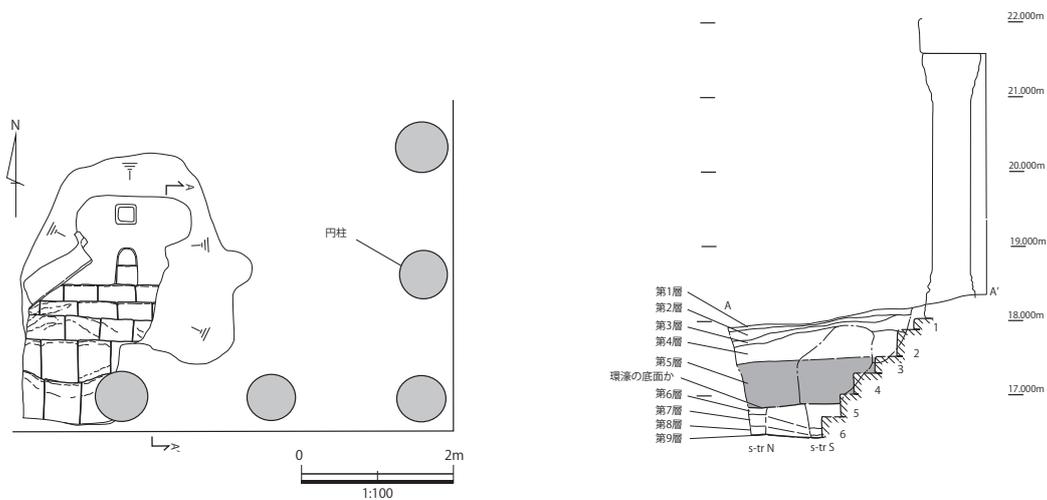


図3 環濠内調査の平面・断面図  
Fig. 3 Plan and section of research area from the moat



写真2 環濠調査地の状況（北西から）  
Ph. 2 Excavation research at the moat (from northwest)



写真3 調査区の状況（北西から）  
Ph. 3 Research area at the moat (from northwest)

表1 環濠内出土遺物観察表

Tab. 1 Table of observation on excavated artifacts from the moat

No	層位	種類	器種	口径	器高	胎土	焼成	色調	備考
1	5	土器	甕	18.4	(5.3)	2～3mm赤色粒	やや軟質	10YR7/3 にぶい黄褐～ 2.5YR5/6 明赤褐	
2	5	土器	甕	28.8	(6.8)	0.5～1.0mm大砂粒	やや軟質	10YR6/6 明黄褐	内外面 鉄分付着
3	5	土器	甕	30.2	(2.8)	0.5～1.0mm大砂粒	やや軟質	7.5YR5/6 明褐	
4	5	土器	壺頸～体部	30.1 (体部)	(7.3)	2mm大砂粒	良好	7.5YR5/3 にぶい褐	
5	5	土器	コンロ	-	(9.0)	1～2mm大赤色粒	堅緻	7.5YR8/3 浅黄橙～	
6	5	土器	甕類体部	-	-	1mm大砂粒	良好	断面等：10YR6/3 にぶい黄橙、 外面縁：10YR1.7/1 黒	
7	4	土器	甕類体部	-	-	2mm大砂粒	やや軟質	10YR6/4 にぶい黄橙	
8	5	無釉陶器	壺肩部	19.8 (肩部)	(6.2)	1.5mm大砂粒	良好	内外面：7.5Y6/4 にぶい橙、 断面：10YR6/3 にぶい黄橙	
9	5	無釉陶器	壺底部	16.0 (底)	(8.0)	0.5～1.0mm大砂粒	良好	7.5Y5/6 明褐～ 10YR6/6 明黄褐色	
10	5	黒褐釉陶器	壺	19.8	(3.1)	0.5mm大砂粒	良好	断面：10YR7/1 灰白～、 釉：2.5Y3/1 黒褐色～	
11	5	黒褐釉陶器	壺頸部	15.6 (頸部最大)	(4.7)	1.5mm大黒色粒	良好	断面：10Y6/1 灰、釉：2.5Y3/2 黒褐、 内面：10YR8/2 灰白	
12	5	黒褐釉陶器	壺底部	16.6 (底径)	(18.4)	5mm大砂粒	良好	断：内外面：N7/ 灰白～ N6/ 灰、 釉：7.5Y5/3 灰オリーブ	
13	5	中国産青磁	碗	15.3	(3.0)	精良	良好	断面：5Y8/1 灰白、釉：7.5Y6/2 灰オリーブ～	外面に別個体 溶着
14	5	中国産青磁	碗	(16.3) 体部	(4.3)	精良	良好	断面：5Y8/1 灰白、釉：7.5Y7/2 灰白～	
15	4	不明陶器	不明 (口縁)	-	(1.7)	精良	良好	断面：7.5YR7/4 にぶい橙、 釉：7.5YR7/2 明褐灰	
16	5	瓦	平瓦	残存長 15.0	残存幅 9.6	5mm大砂粒	良好	5YR7/4 にぶい橙	

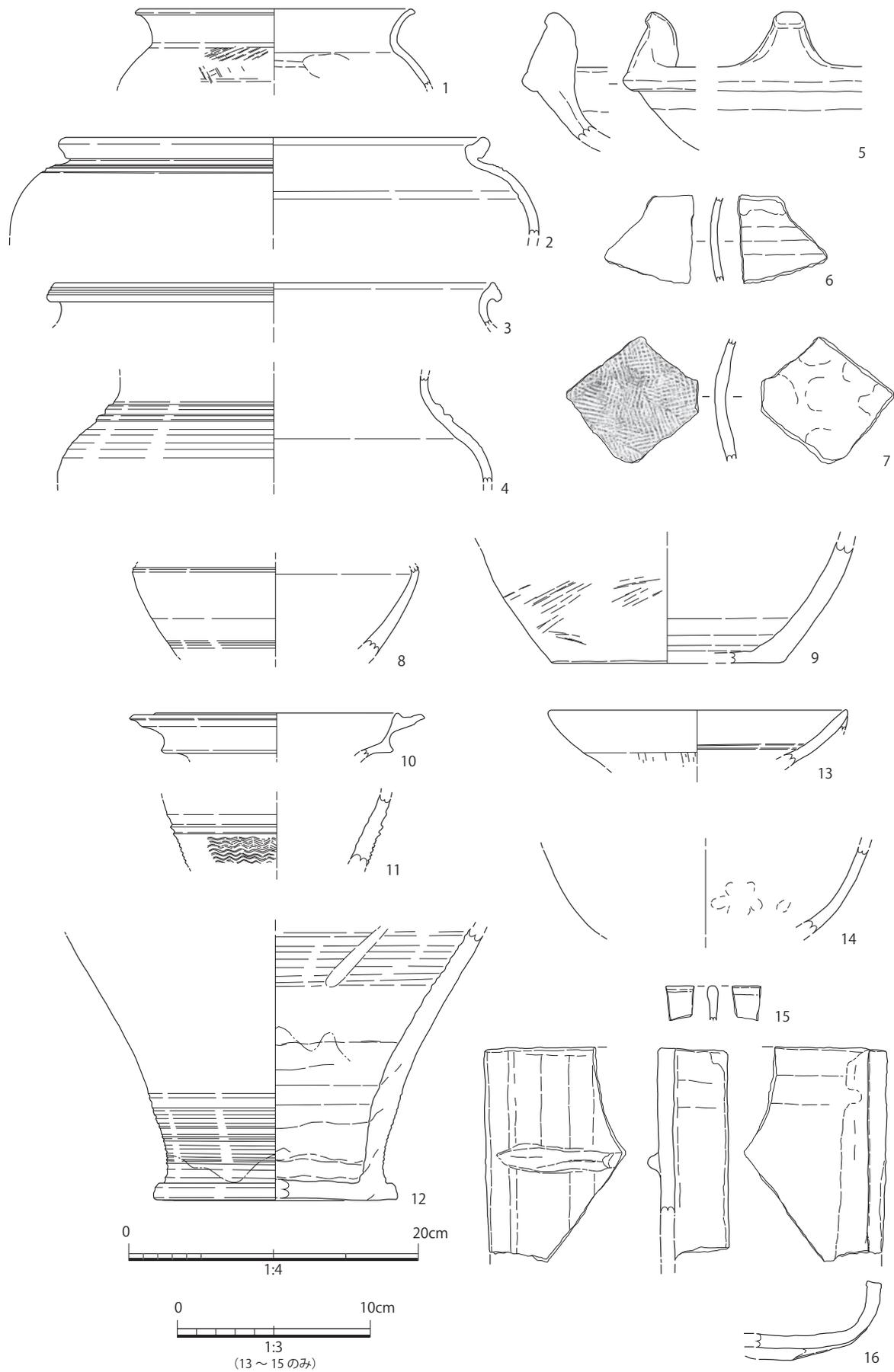


図4 環濠内出土遺物実測図  
 Fig. 4 Excavated artifacts from the moat



写真 4 No. 1 (外面)  
Ph. 4 No. 1 (outside)



写真 5 No. 1 (内面)  
Ph. 5 No. 1 (inside)



写真 6 No. 2 (外面)  
Ph. 6 No. 2 (outside)



写真 7 No. 2 (内面)  
Ph. 7 No. 2 (inside)



写真 8 No. 3 (外面)  
Ph. 8 No. 3 (outside)



写真 9 No. 3 (内面)  
Ph. 9 No. 3 (inside)



写真10 No. 4 (外面)  
Ph. 10 No. 4 (outside)



写真11 No. 4 (内面)  
Ph. 11 No. 4 (inside)



写真12 No. 5 (外面)  
Ph. 12 No. 5 (outside)



写真13 No. 5 (内面)  
Ph. 13 No. 5 (inside)



写真14 No. 6 (外面)  
Ph. 14 No. 6 (outside)



写真15 No. 6 (内面)  
Ph. 15 No. 6 (inside)



写真16 No. 7 (外面)  
Ph. 16 No. 7 (outside)



写真17 No. 7 (内面)  
Ph. 17 No. 7 (inside)



写真18 No. 8 (外面)  
Ph. 18 No. 8 (outside)



写真19 No. 8 (内面)  
Ph. 19 No. 8 (inside)



写真20 No. 9 (外面)  
Ph. 20 No. 9 (outside)



写真21 No. 9 (内面)  
Ph. 21 No. 9 (inside)



写真22 No. 10 (外面)  
Ph. 22 No. 10 (outside)



写真23 No. 10 (内面)  
Ph. 23 No. 10 (inside)



写真24 No. 11 (外面)  
Ph. 24 No. 11 (outside)



写真25 No. 11 (内面)  
Ph. 25 No. 11 (inside)



写真26 No. 12 (外面)  
Ph. 26 No. 12 (outside)



写真27 No. 12 (内面)  
Ph. 27 No. 12 (inside)



写真28 No. 13 (外面)  
Ph. 28 No. 13 (outside)



写真29 No. 13 (内面)  
Ph. 29 No. 13 (inside)



写真30 No. 14 (外面)  
Ph. 30 No. 14 (outside)



写真31 No. 14 (内面)  
Ph. 31 No. 14 (inside)



写真32 No. 15 (外面)  
Ph. 32 No. 15 (outside)



写真33 No. 15 (内面)  
Ph. 33 No. 15 (inside)



写真34 No. 16 (上面)  
Ph. 34 No. 16 (upper surface)



写真35 No. 16 (下面)  
Ph. 35 No. 16 (lower surface)

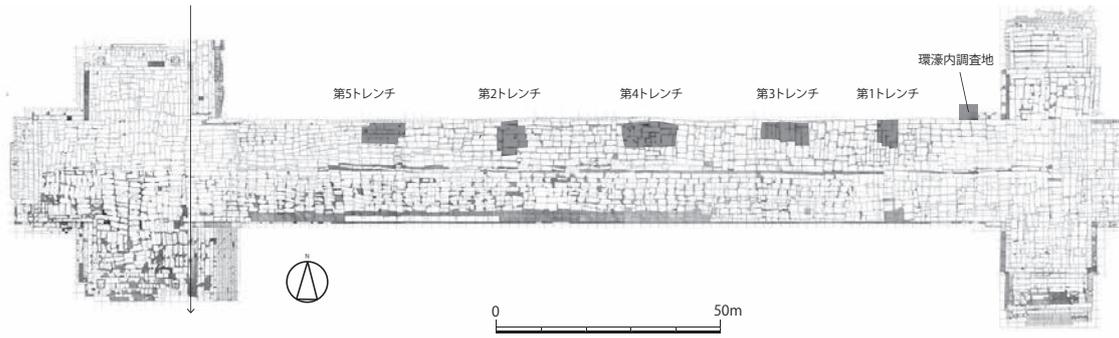


図5 西参道内調査地点の位置  
Fig. 5 Investigation site on the western causeway



写真36 西参道第1トレンチの調査状況(西から)  
Ph. 36 Trench 1 on the western causeway (from west)

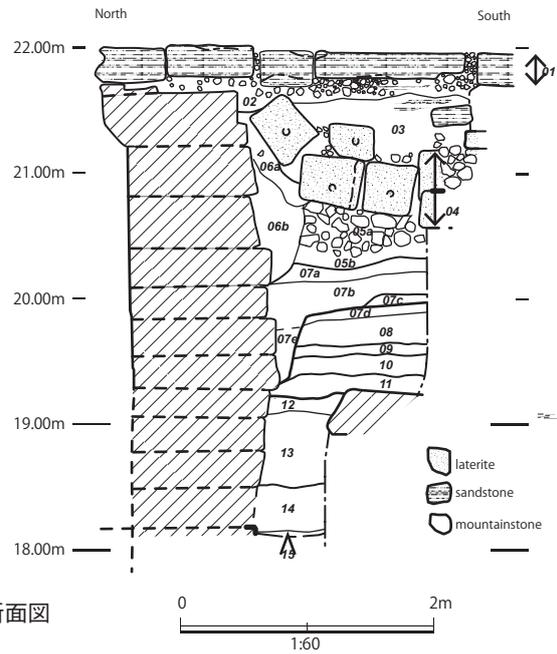


図6 西参道第1トレンチの断面図  
Fig. 6 Section of trench 1

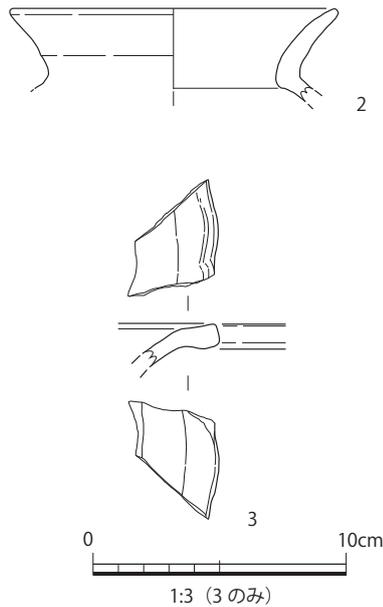
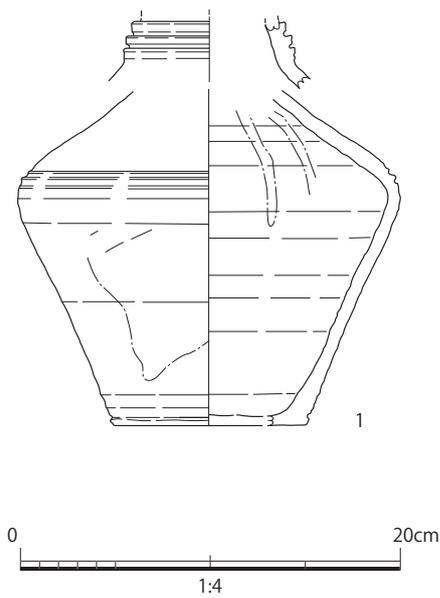


図7  
西参道出土の遺物  
Fig. 7  
Excavated artifacts  
from the western  
causeway



写真37 No. 1 (外面)  
Ph. 37 No. 1 (outside)



写真38 No. 1 (内面)  
Ph. 38 No. 1 (inside)



写真39 No. 2 (外面)  
Ph. 39 No. 2 (outside)



写真40 No. 2 (内面)  
Ph. 40 No. 2 (inside)



写真41 No. 3 (外面)  
Ph. 41 No. 3 (outside)



写真42 No. 3 (内面)  
Ph. 42 No. 3 (inside)

表 2 参道出土遺物観察表

Tab. 2 Table of observation on excavated artifacts from the causeway

No	調査区	層位	種類	器種	口径	器高	胎土	焼成	色調	備考
1	5	参道構築盛土	黒褐釉陶器	壺	20.2 (肩部)	(17.8)	0.5 ~ 1.0 mm大砂粒	良好	断面：10YR6/3 にぶい黄褐色、内外面：5Y5/1 灰~10YR7/3 にぶい黄褐色、釉：2.5Y4/ オリーブ褐	
2	3	参道内崩落時	土器	甕	17.2	(4.3)	0.5 ~ 1.0 mm大砂粒	やや軟質	7.5YR6/6 橙~5YR6/6 橙	
3	3	参道内崩落時	中国産青磁	稜花盤	-	(1.7)	精良	良好	断面：5Y8/2 灰白、釉：10Y7/2 灰白~7.5Y7/3 浅黄	